

I 主題設定の理由

1. 児童の実態と問題意識

私が学校サポーター活動と教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを行ったA小学校では、人とかかわることを大切に思う気持ちや自身の心が発達してきたという実感をもっている児童を1人でも増やしたいという思いのもと、異学年での集団活動を通して、互いに支え合い、思いやりや感謝の心と社会性を育てようとしている。しかし、自分の気持ちを正直に伝えることが苦手な児童もいる。

今回の実習で私が担当した学級の児童たちは、1年生の頃から話し合い型の授業やかかわり合いを重視した教育を受けてきている。そのため、ペアやグループでの活動を通じた交流ができる児童が多い。

また、様々な資料から必要な情報を読み取り、自分の設定したテーマに合わせて情報を整理し、読み取った情報から思ったことを新聞にまとめる力も十分にある。

しかし、多くの児童が、生活経験の中で思った抽象的なことを文章で表現することに苦戦していた。これらは、児童たちが自分の思いを表現するためのことばを十分に持ち合わせていないこと、自分の心の中にあるものごとを自分の言葉であらわすことに苦手意識をもっていることが背景にあるのではないかと考える。

また友達との会話では、自分の思いを伝えることに意識がいくことが多いようである。相手の言動の背後にある思いに触れながら、お互いを受けとめ合い、応答し合える環境づくりが大事だと考える。

以上のことから、児童の課題は次の2点であると考えた。1点目は、普段の生活体験から得た思いや考えを、素直に文章で表すことが苦手なことである。2点目は相手の言動の背後にある思いに触れながら、お互いを受けとめ合い、応答し合える機会が少ないことである。

村山士郎(2009)は「近年、……多くの生活語を体験しないままにことばだけを知っている子どもが増え、人間的な『思い』がことばの中に宿るプロセスが希薄になっているのではないか。」と述べている。つまり村山は、生活体験・感情とことばの教育が結びつかないために、感情表現や感情コントロールの苦手な児童、自分なりの表現が苦手な児童の増加につながっている、と考えている。この課題に対し村山は、書いたものを安心して受けとめてもらえる関係を築くこと、生活体

験や感情を文章にすることが大切であると述べている。

さらに楠凡之(2015)は児童の人間関係について、「幼少期から自分の存在を肯定してくれる相互応答的な関係を奪われてきた子どもたちは、自分の存在を丸ごと受けとめてくれる関係を切実に求めながらも、結果として築く人間関係は支配―被支配の関係、傷つけあう関係に陥りがちである。また、相互依存関係であるがゆえに、その中に自分の生きづらさや葛藤を投げ込んでしまうことも少なくない。」と述べている。またこの課題に対して、応答的な人間関係を築くためには、「お互いの行動の背後にある思い」を理解できるように教師が援助していくことが必要であるとも述べている。

私は村山と楠の考えを参考に、実習で担当した学級の児童たちには、書いたものを安心して受けとめ合い、お互いの言動の背後にある思いを感じとることで、普段の生活体験で得た思いを文章にする力、応答的な人間関係を築く力を育むことが必要であると考えた。

自ら思ったことを表現し、応答的な人間関係を築くための一つの方法に、作文教育(生活綴方教育)がある。作文教育は、1つには自分の生活に向き合って作文を書かせることを通して、自分の思ったことを素直に書くこと、2つには何気ない生活の中で、心をふるわせ動かした事実を書き読み合うことを通して、心がひらかれ、つながりあう人間関係を構築し自己肯定感とともに他者理解を育て深めることを最大の目的としている(日本作文の会、2016)。

また、小川太郎(1966)によれば、生活綴方教育では、児童さまざまな偏見にとらわれずに生活の事実や考えや感情をありのままに表現できるような指導を重視している。

これらのことを踏まえて、私は児童たちの書く力と児童同士のつながりに注目した。教師力向上実習では、自分の思いを文章にあらわすためにA小学校で行われている、「書けマス作文」の発展の追究や日記指導、授業での学びの共有を通して、自ら思ったことを書き、応答し合える児童の育成を目指して取り組んでいきたいと考えた。

「書けマス作文」とは、まず3分間で教師が提示するテーマについて自らの思いを書き、3分で書けたところに印をつける。その後2分間で作文にまとめ、作文の内容をさらに短く表現した川柳まで完成させるというものである。この実践は、限られた時間のなかで

経験したことや情報を整理し、自分の思いとともに文章でまとめる力が育成されると考える。私は「書けマス作文」や日記指導、授業での学びの共有を通して、生活体験や感情を書きことばで表す機会を増やし、それを受けとめあう関係をつくることで、子どもたちの書く力と友達と応答し合える力が育成されるのではないかと考えた。

2. 研究主題の意味

以上の検討をふまえ、本研究では児童たちが普段の生活体験の中で感じたことや思ったこと、疑問や考えたことなどを素直に文章で表すことを「自ら思ったことを書く」とした。

また、意見や感想を伝え合う活動を通して、書いた文章の良し悪しではなく、お互いの書いたものを安心して受けとめ合い、書き手の背後にある思いを理解し合い、お互いの存在を肯定し合うことを、「応答し合う」とした。

生活の中で見つけた疑問や自然な感情や考えを素直に文章で表し、それを使った交流を通して受けとめ合う関係やお互いを認め合える児童を育てたいと思い、研究主題を「自ら思ったことを書き、応答し合える児童の育成を目指して」とした。

II 研究の方法

1. 研究の目的・目指す児童像

本研究では、実践対象であるA小学校第6学年1組の児童たち（男子18名、女子15名、計33名）が次の2点を達成することを目的としている。

1 点目は、学校生活と日常生活につながりを持ち、自ら思ったことを書けるようになることである。児童たちが普段の生活の中で感じたことを素直に文章に表し交流を重ねることは、児童が友達の新たな一面を知ることにもつながる。そのため、児童は今までよりも広い人間関係が構築できるようになるのではないかと考えた。

2 点目は、児童が自分が書いた文章を受けとめてもらう経験をしながら、友達と応答し合えるようになることである。教師からのコメントや友達との会話を通して、また自分の書いた文章や友達の文章を認め合うことで文章を書くことへの抵抗が少なくなるとともに、友達と応答し合えるようになるのではないかと考える。また、読み手を意識して書くことによって文章の書きづらさや文章への苦手意識が減り、児童たちが自ら書くようになるのではないかと考えた。

2. 研究の手立て

①日記指導

作文への抵抗感を減らすために、自主ノートを使って日記を書かせた。実習Ⅰでは週に2日は1ページを使って日記を書き、それ以外の日は普段感想を書いている部分に日記を書かせるようにした。実習Ⅱでは曜日のみ指定し、書く分量に規定は作らないこととした。児童たちの自主学習もしたいという気持ちを尊重したためである。また実習Ⅱでは、「書くことがなくて困っている。」という児童の声を受けとめ、2回ほど日記のテーマを設定した。実習Ⅰ、実習Ⅱを通して、児童が書いた日記はその日のうちにコメントを付けて返すようにした。

②テーマ付き「書けマス作文」

学校行事や日常生活の中で感じることや、教師から提示されたテーマについて「書けマス作文」を使って書かせた。担任の先生と協力してテーマを決め、提示するようにした。テーマは、森川正樹（2011）と水登伸子（2017）に掲載されているお題リストの中から、児童の様子や生活に直結しそうなものを選んだ。また、児童が考える時間を確保するために、従来の「書けマス作文」より多く時間をかけたり、朝一番で黒板にテーマを書いたりした。また今まで通り、行事の振り返りの「書けマス作文」も行った。

③国語科「風切るつばさ」、社会科「新しい日本、平和な日本へ」授業実践

実習Ⅰでは、国語科「風切るつばさ」の授業実践を行った。その際授業のまとめや感想を、ノート用の「書けマス作文」の原稿用紙を使って書かせた。授業で学んだことと、それについて考えることについて理由を明らかにしながら書かせるようにし、考えたことを相手が分かりやすいように整理して伝えられるようになることを目指した。

実習Ⅱでは、社会科「新しい日本、平和な日本へ」の授業実践を行った。児童が歴史的・社会的事象を身近なこととしてとらえ、自分なりの意見をもって友達と共有できるよう、授業のおわりに「自分だったらどう思うか」という設問を設けた。授業の振り返りの時間を使って児童に自分なりの意見を書かせ、次時の初めに全員の意見をまとめたプリントを配って意見の共有を図った。

④「風切るつばさ」オリジナルストーリー作成（実習Ⅰ）

国語科「風切るつばさ」の学習の後、物語の続きを自由に書かせた。児童たちが自ら書く意欲を沸かせられるように、教師側から分量の指定は出さず、絵を入れてもよいこととした。また、漫画で描く案も教師側から提案し、様々な文章の表現方法があることを伝えた。教師側からの唯一の条件として、一番初めの場面

で主要な登場人物の会話を入れるようにし、本文中の登場人物の心情について、読み取りを確認した。

⑤学活「オリジナル作文コンテスト」(実習Ⅰ)

学活の時間に、「書けマス作文」、「オリジナルストーリー」、「日記」部門に分かれて交流会を開催した。自分でエントリーする作品を選び、児童にオリジナルの賞を決めさせることで、主体的に活動に参加できるよう工夫した。さらにお互いの作品について直接意見交流することで、自分の作品だけでなく友達の作品も紹介し、友達のよさや新たな一面を発見できる交流をめざした。付箋を使ってコメントを残すことで、児童同士での応答し合う場が生まれるよう工夫した。

3. 検証方法

- ・日記の分析
- ・書けマス作文の分析
- ・授業でのノート、振り返り作文の分析
- ・アンケート結果の分析(実習Ⅰにおいては、平成29年5月29日と6月23日に実施した。実習Ⅱにおいては、平成29年11月22日と12月21日に実施した。)

なお本発表では、児童の日記や「書けマス作文」、を多数引用するが、個人情報にかかわる表現は伏字に直した。

Ⅲ 教師力向上実習Ⅰ(期間：平成29年5月29日～6月23日)

1. 手立て

①日記指導

自主ノートを使って、週2回日記を書かせた。児童の作文への抵抗感を低減することを目標とした。また、私がその日のうちにコメントを入れて返却することで、児童と教師との関係づくりにも繋がると考えた。

②テーマ付き「書けマス作文」

学校行事や生活体験の中で思ったことについて、森川(2011)に掲載されているお題リストの中からテーマを提示し、「書けマス作文」を書かせた。さらに、児童が書く内容を考える時間を確保するために、従来の「書けマス作文」より多く時間をかけたり、朝一番で黒板にテーマを書いたりした。

③「風切るつばさ」オリジナルストーリー作成

国語科「風切るつばさ」の学習の後、物語の続きを自由に書かせた。分量の指定はせず、絵を入れてもよいこととし、漫画で描く案も提案した。児童が本文の内容や登場人物の心情の変化をどう読み取ったのかを判断するために、物語の一番初めの場面で主要な登場人物の会話を入れるようにした。

④国語科ふり返しシート

授業のまとめや感想をノート用の「書けマス作文」の原稿用紙を使って書かせた。理由を明らかにしながら書くように意識させ、内容を整理して伝えられるようになることを目指した。

⑤学活オリジナル作文コンテスト

実習の終盤、学活の授業を使って「書けマス作文」、「オリジナルストーリー」、「日記」部門に分かれて交流会を開催した。児童が主体的に活動に参加できるよう工夫し、友達のよさや新たな一面を発見できる交流をめざした。さらに、付箋を使ってコメントを残し、児童たちが応答し合う場が生まれるよう工夫した。

2. 日記指導

《児童の日記から》

A児(男子)

A児は日記指導を通して、設問①(書けマス作文を書くことが好きだ。)と⑨(自分の気持ちや考えたことを、素直に作文に書くことができる。)が肯定的に変化した児童である。

「スプラトゥーンをやった」

きょう家でスプラトゥーンをやりました。ランクが下がりそうになったけど下がりませんでした。たのしかったです。

A児がこのような日記を書いたとき、私は「スプラトゥーン、先生も気になる！ランクがあるんだね。おこづかいのため、先生も買うぞー！」とコメントした。あえて友達のような言葉でコメントしたのは、A児の緊張をほぐし、私と応答し合う関係を築きたいと思わせるように意識したためである。こうしたコメントを繰り返した結果、実習最後のA児の日記は次のようなものになった。

「もしスเปアポケットがあったら」

もしスペアポケットがあったら、どこでもドアともしもボックスと、タケコプターがほしいです。もしもボックスでお金のいらない世界にしたいです。

事実を簡単に記し、最後に感想を書いていた先の日記と比べると、A児の素直な思いが文章に表れているのが読みとれる。文章を詳しく書くことは苦手だが、一番伝えたいことはきちんと文章にしようとしているようだった。

A児のアンケート結果を見ると、設問⑨において回答番号が2から1に変化している。その理由の変化は、「間違っていたらどうしようと思うから」から「みんなに伝えたいから」である。このことから、A児が自ら考えたことを書くことに抵抗がなくなり、さらに周

囲に自分の思いや考えを伝えたいと思っていることが分かる。

これらの結果から、児童と対等な立場からコメントし、教師と児童との応答し合う関係を意識することが児童の素直な気持ちを引き出し、書くことへの抵抗感を減らすことに有効だと考えられる。

B児（男子）

B児は日記指導を通して、設問⑨が肯定的に変化した児童である。

B児は、実習初日に以下の日記を書いている。

今日そろばんに行きました。
しけん1級勉強をしました。
『カチカチ』
そろばんの音がひびきます。
2時間やりました。
2時間目はF1をやりました。
かけ5分わり5分みとり5分です。
『くーむずかしいー』
という声をだしてしまいました。
しかしさいごにはとけてうれしかったです。

この日記に対し私は、「おつかれさまでした！そろばんの力は、大人になってからも役に立つから、今のうちにがんばって力をつけよう。先生も、習っておけばよかったよお。」と、B児の努力をねぎらい、私自身の経験を踏まえた、更なる努力に向けて励ますようなコメントをつけた。ほかにも、日記にセリフや絵を入れたことに「分かりやすく伝わってきます」とコメントしたり、「半九九って初めて知りました！」と素直な思いを述べたりした。私自身の経験を書いたのは、B児の緊張をほぐし、応答し合う関係が生まれるように意識したためである。

こうしたコメントの積み重ねの中で、実習期間に書いたB児の最後の日記は、次のように変化した。

今日がっこうで50mクロールをはかりました。
44秒でした。どうしたら速くなるのかを△△先生にきいたら、いきつぎをへらしたらといわれたので次はそうしたいです。またあしたはひらおよぎをはかるので、
『やったー』
『よっしゃー』
といえるようにがんばりたいです。
すいえいきろくかいには、40秒から30秒ともっと速くおよげるようになりたいです。
また、ほかの人にも勝てるように、スイミングでも、もったきあいをいれてもっともっと速く泳ぐために、いきつぎをへらしたり、クイックターンを少しでも速くできるように、スイミングの先生に聞きたいです。とくにひら泳ぎに力をいれていきたいです。

最初の日記と比べると、明らかに文章が長くなって

いるのが分かる。最初は自分しか登場しなかったが、次第に友達や周りの人が登場するようになり、絵も詳しく描くようになった。最後の日記では自分の課題を設定し、周りの人に教えてもらいながらどのように解決していくのかが書かれている。

実習前と実習後に行ったアンケートの結果を比べてみると、設問⑨において、回答番号が3から1に変化している。番号を選択した理由の変化は、「他のことでマスが埋まってしまう」から、「自分の気持ちの方が書きやすいから」である。

これらのことから、教師からのねぎらいの言葉や素直な思いがきっかけで、児童が自ら思ったことを書きたいと思ったり、日常生活での周りの人とのかかわりに目を向けるようになったのではないかとと思われる。

C児（男子）

C児は日記指導を通して、アンケートの結果が肯定的に変化しなかった児童である。

C児は実習が始まった頃、次のような日記を書いていた。

今日は月例マラソンがあり久しぶりにやるのでやりたいけどやりたくないというもややした感じでやっていて さいしょにとぼしすぎてさいごの方にバテてなかなか上手に走れませんでした。

この日記に私は、「マラソン、本当にお疲れさまでした！よくがんばったね！走った後はゆっくりお風呂に入ったり、マッサージをしたりして、疲れが残らないようにしよう。」と、C児の努力を認めるようなコメントをした。

しかし、実習期間中最後の日記でも、

プールでクロール 50mおよげるかな？としんぱいしながらやってみたらいいにいけました。だけどターンのときに口いっぱい水が入ってしまいロスしてしまったけど50何秒かでおよげました。

と、日常での出来事でうまくいかなかったことが書かれ、そのあと自分の中で納得する文章が書かれて終わっている。また、実習が進むにつれて児童自身の気持ちを表す言葉も少なくなっていた。

アンケートの結果を見ると、設問⑨では回答番号が2から3に変化している。選択した理由は、「ほとんどは自分の気持ちを書けるけど、たまにこのこと知られたくないなと思ってしまうときがある。」から、「恥ずかしいことがあったら素直に書けない」と変化した。

これらの結果から、この児童は私と応答的な関係を築くためには、共感的なコメントや頑張りを認めるコメントだけでは有効ではなかったことが分かる。アンケートで「恥ずかしいことがあったら素直に書けない」と記述していることから、私から日常を自己開示し、C児が心をひらき、「恥ずかしい」と感じる機会を減らす

工夫ができたならよかったのではないかと考える。

3. テーマ付き「書けマス作文」

「なりきり作文」

テーマ付き「書けマス作文」のうち、「なりきり作文」については、児童たちの個性あふれる文章が多数みられたテーマである。

D 児（女子）はなりきり作文をテーマにした際、次のように書いた。

私は、総理大臣です。私の一日は、会議だらけ……。他の国の大統領もかわり、大変……。でも、私は国のためにがんばる総理大臣である。すいみん時間は約一日で1時間。短いけれどこの間でいろんな夢を見る。今日の出来事、私じゃなくなった時次の総理大臣のことなど。たまにはお酒飲んだり……。へへへ、これもこれだけのいいのであーる。

この文章では、D 児の豊かな想像力がうかがえる。口語体で書かれた文章から、D 児が考える「総理大臣」という職業について、自ら思ったことを素直に書いた文章であることが読み取れる。また、「楽しい」という言葉で文章が終わっていることから、D 児自身も楽しみながらこの作文を書いたのではないかと考える。

D 児の設問①におけるアンケート結果は、2から1に変化している。理由は、「題によって思いつくのと思いつかないのがある」から、「作文を書くことですっきりする」に変化している。書くテーマによって書く内容や文章量に差が出ているが、心が動いた行事やテーマがあると、文章量が増えたり素直な気持ちが書かれたりすることが多いと分かった。児童の生活や自ら思ったことを引き出すきっかけをつくる上で、テーマを提示することは概ね有効なようである。

「先生への手紙」

このテーマは、児童の素直な願いが文章によく表れていたテーマである。

E 児（男子）は「先生への手紙」というテーマで「書けマス作文」を書いたとき、次の文章を書いている。

竹下先生へ

教育実習が終わっても、6年1組にいますか？先生が2人いた方がいいのでいてください。もっと、授業を楽しくしてください。〇〇先生に、土、日は野球で宿題ができないので、へらしてくださいと、言ってくださいお願いします。

A しょうに もっといてよね おねがいよ

この作文に対し私は、「教育実習が終わっても、6年1組に来るよ！よろしくね。

E 児さんは、どんな授業が楽しい授業かな？先生も勉強したいので、教えて下さい！

宿題については、〇〇先生にお話聞いてみるね。」と返事を書いた。その際、E 児の質問に素直に答えることで、応答し合う関係が深まるように意識した。また、「楽しい授業」について具体的に質問し、E 児自身が「楽しい」とはどんなことを考え、「楽しい」という一言にも様々な種類があることに気づくきっかけを設けた。

E 児の設問①におけるアンケート結果は、3から2に変化している。回答した理由の変化は、「文章が思いうかばない」から「好きだけど、言葉が思いうかばない。」である。

文章が思い浮かばず「書けマス作文」に少し苦手意識をもっていたE 児も、このテーマのように「普段言いたいけれどなかなか言えないこと」を自由に書くことができる自分から鉛筆をもち、楽しそうに自ら思ったことを書いていた。またE 児は、書く内容の自由度が高かったことで、先生から求められていることを書くのではなく、自分が思ったことを素直に書いていと感じたのではないだろうか。その結果、アンケートの記述に「好きだけど」という言葉が加わったのだと考えられる。

「高れい者ぎじ体験」

また、印象深い行事に関する振り返りも、児童の自ら思ったことを引き出すのに効果的であった。

F 児（女子）は高齢者疑似体験を振り返って、以下の文章を書いた。

私は、今日、福祉実践教室で高れい者ぎじ体験をしました。曇った眼鏡やおもりのついたものを着け、階段をのぼりおしたり、小さな字を読んでみたりしました。全て、私が普通に生活していたものと真逆で、とても大変でした。どんなことをやるにせよ、とても不自由でした。高れい者の方々は、こんなに大変な生活をしていたんだなと実感しました。もし、どこかで、高れい者の方に出会ったら、何か手助けをしたいと思います。良い経験ができて良かったです。

この作文からはF 児の体験を伴った驚きと、そこから思ったことを具体的に読み取ることができる。作文の前半には高齢者疑似体験で自分がどんなことを体験したのかが詳しく書かれており、「私が普通に生活していたものと真逆」という言葉から、F 児が大きな驚きを感じたことが分かる。またその後の「高れい者の方々は、こんなに大変な生活をしていたんだなと実感しました。」という言葉は、F 児の素直な気持ちがよく表れているのではないかと考える。

F 児の設問①におけるアンケート結果は、回答番号が2から1に変化している。また番号の選択理由は、「一週間に一度、『書けマス作文』を書くことによって、国語力が身につくと思うから。でも、文章が思いつかなかったり、少しめんどろな時があるから。」から、「一

つのテーマについて考え、文章を書いていくことが楽しいから。」に変化している。

一方F児は、「六年生で楽しみなこと」というテーマでは、以下の作文を書いている。

私が、六年生で楽しみなことは、修学旅行です。修学旅行は、京都、奈良の一泊二日です。旅館で過ごすとき、とても楽しみでした。そして、六年生のクラス替えの時、仲の良い友達と同じクラスになれるか心配でした。でも、仲の良い友達と同じクラスになれたので良かったです。その子たちと一緒に、同じ班になれたらいいと思います。9月の修学旅行までがとても楽しみです。

この文章と「高れい者ぎじ体験を振り返って」の作文を読み比べると、こちらの作文は具体的な情報が少なく、気持ちを表す言葉も少し緊張しているように感じた。この作文について、修学旅行は楽しみだが仲の良い子と同じグループになれるか不安でもある、と私は読み取った。F児にとって、これから経験していくことについて、具体的に想像することは難しかったようである。

このように、まだ経験していないことについて書くより、高齢者疑似体験のような心が動いた経験を振り返ったほうが、F児は比較的分かりやすい文章で自ら思ったことを素直に書くことができると分かった。

分かったこと

これらの結果から、普段言いたいけれど言えないことや、児童が自ら書きたいと思える出来事の振り返りをテーマにすると多くの児童が自ら思ったことを書きやすいということが分かった。一方で、「自由とは何か」というような抽象的なテーマを提示すると、多くの児童が困惑して文章量も減少した。そのため、今後は児童の生活体験や日常につながり、書く内容が具体的にイメージできるテーマを選んで実践したい。またコメントでは、素直に自分の思いを書けていることをほめ、緊張感や評価を意識した文章をほぐすことをねらいたい。

4. 「風切るつばさ」オリジナルストーリー作成

国語科の授業実践をきっかけに、児童たちが休み時間にオリジナルストーリーを考えて遊ぶようになった。その様子を見て、授業実践の最後に一人ずつオリジナルストーリーを書くことを提案した。児童たちは絵を入れたり漫画で表現したり、それぞれが表現しやすい方法で物語を書いていた。学活の時間で使うと伝えると、家に持って帰って書き直す児童どももいたほどであった。

この実践の成果としては、児童たち自身の言葉で物語を完成させることができたことである。児童たちの中で何を書くかイメージができていたため、今までの作文実践のように「何を書いたらいいか分からない」と

言う児童は一人もいなかった。

以上から、児童が興味をもっていることに即した内容の文章を書く経験をするとは、児童たちの作文への抵抗感を減らすことにつながると考えられる。

一方で課題としては、物語の中に児童たちの思いを反映できなかったことである。教科書の本文を読んで、登場人物の心情の変化をどのように読み取ったのかを会話文から推察したが、それに対する自らの思いを物語やあとがきに反映させることができなかった。児童の想像したお話で終わってしまったため、その後の児童たち同士のかかわり合いが児童の応答し合う力に直接かかわるようなものにならなかった。

5. 国語科授業振り返り作文

用紙にマス目があることで、児童たちは最後まで文章を書こうと努力していた。また、指定されたマス目の中で文章を収めるよう努力している様子も見られた。さらに、次時間の初めに子どもたちが書いた「書けマス作文」のまとめをプリントにして配布することで、児童たちは自分の作文が載っていると嬉しそうに印をつけたり、友達のまとめを熱心に読んだりしていた。プリントはノートに貼ることで、単元の学習が終わった後でも各自で見返せるようにした。休み時間に友達と読み合う姿も見られ、児童たちは自然と応答し合うことができているようだった。

課題は、書く内容が感想中心になっていたことである。「新しく学んだこと」、「自分の考え」を短時間で思い浮かべ、文章にすることは児童たちにとって難しそうであった。また、授業内で書く時間を十分に確保できなかったことも大きな課題であると考ええる。今後はキーワードを設定し、児童たちが自分の言葉でまとめを考え、十分に書ける時間を確保したい。

6. オリジナル作文コンテスト

活動中の児童たちは、終始楽しんで交流しているようだった。いつも仲のよい友達とのみかかわる傾向にある児童も、クラス全員の作品を見てより多くの友達と応答し合おうとしていた。ワークシートのメモを見ると、グループの友達の作品について要点をおさえてまとめてあったり、自分の感想や友達の作品について質問して新たに得た情報などが書き込まれていたりした。「友達の作品を、ほかの人に説明しなければならぬ」という状況が、グループ内の交流をより活性化したと考えられる。

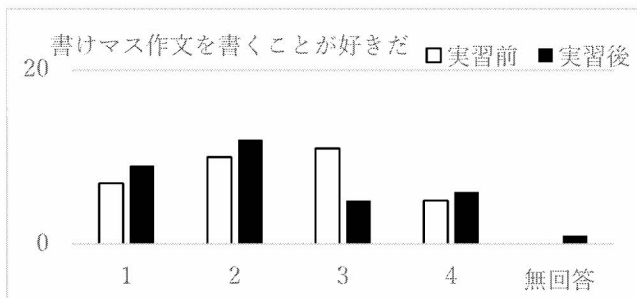
授業後に振り返りを書かせると、「みんなのを見てすごくいい作品など、自分のをみんなに見てもらってうれしかった、すごく楽しかった。」「みんなの物語や『書けマス』、日記がみれてとてもよかった。これからみんなの物語や色々なものをみたい。」などのように、交流に充実感を感じている児童や他者の作品を読むこ

とで刺激を受けている児童が多かった。

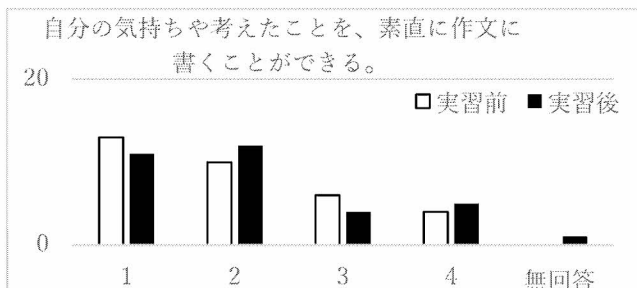
課題は、児童たちの努力を形に残すことができなかったため、児童同士の応答し合う関係が浅いものとなってしまったことである。今後は児童たちの作品を文集や通信にのせて、全員がゆっくり作文を読めるようにしたい。

7. アンケート結果（設問①と⑨）

設問①は「書けマス作文を書くことが好きだ」、設問⑨は「自分の気持ちや考えたことを、素直に作文に書くことができる。」という問いで、それぞれ「1：あてはまる」、「2：どちらかというにあてはまる」、「3：どちらかというにあてはまらない」、「4：あてはまらない」の中から1つを選ぶという方法で回答してもらった。



【グラフ1：実習Ⅰでのアンケート調査結果（設問①）】



【グラフ2：実習Ⅰでのアンケート調査結果（設問⑨）】

上記のグラフを見ると、設問①と設問⑨の両方において1と2を回答した人数が多く、実習後に1と2を選択した人数の合計は、設問①では4人増加し設問⑨では実習前と同数だった。また、設問①と⑨の両方において、3を回答した児童が減少したことも特徴の一つであると考えられる。

実習後のアンケートで設問①と⑨で数値が上がった2. 児童は、選択した理由に「作文を書くことでスッキリする」（設問①）、「みんなに伝えたいから」（設問⑨）など書いている。

このような記述から、さまざまな手立てを試みた結果、自ら思ったことを素直に作文に表すことに気持ちよさを感じ、友達との対話を通して自分のことを知ってほしい、友達のことを知りたいと思う児童が増えたのではないかとと思われる。

一方、4に回答番号が変化した児童の理由を見ると、「書くことはいいけど、テーマにあわせると思いつか

ないときがある」（設問①）、「自分の気持ちや思いをかくのはにがて」、「すなおにかきづらい」（設問⑨）といった記述があり、まだ周りの人に対して緊張していたり、作文のテーマに抵抗を感じたりしている児童がいることが分かった。どの理由からも自分の文章を読む相手に緊張感をもっていることが読み取れ、私との文章を介した交流がうまく作用しなかったことが分かる。

また設問⑨は、1と回答した児童は減っているが2と回答した児童は増えていることが分かる。実習後に2を回答した子どもたちの理由を見ると、「話すことの難しいことでも、文字としてなら書けるから。」という記述がある一方で、「人に見られたら恥ずかしい」、「できるけど多くは書けない」といった記述もあった。

このことから児童たちは、日記指導やテーマ付き「書けマス作文」の実践を通して、自ら思ったことを書くことには抵抗を感じにくくなっているが、それを応答し合うことを考えたときに、まだ作文への苦手意識が残っているのではないかと考えた。

このような結果となった理由として、作文を交流する機会が少なかったからではないかと考える。国語の振り返り作文を共有したときは、どの児童も楽しそうに自分や友達の文章を読んでいて、日記や「書けマス作文」もこのように共有し、クラス全員が一緒に読める機会を設定できたら、少しずつ自分の文章を読む友達への緊張感がほぐれていったのではないだろうか。

IV 教師力向上実習Ⅰの成果と課題

1. 成果

この実習を通して、私は2つの成果を得ることができた。1つ目は、分量の指定はせずに日記や「書けマス作文」の回数を増やし、文章を書く時間を確保することで、作文への抵抗感が減少したことである。

2つ目は、共感的なコメント、自己開示的なコメントをして児童との応答的な関係の育成を意識することで、児童たちが日記を肯定的に受け入れ、自ら思ったことを素直に書く気持ちよさを感じるようになったことである。

2. 課題

一方課題としては、次の2つが挙げられる。1つ目は作文の抵抗感をさらに減らすために、児童の作文を読みながら、児童がどんなコメントを求めているのかを読み取ることである。児童が書いた文章の背後にある気持ちを読み取り、それに合ったコメントを返すことで児童の応答し合う力を引き出せるようにしたい。

2つ目は、作文を使った交流をさらに増やし、児童たちが応答し合う機会を増やすことである。オリジナル作文コンテストのワークシートの記入などから、児童たちが友達と作品を交流したいと思っていることが

分かった。実習Ⅱでは学級通信や文集といった手法で、友達の作品がいつでもゆっくり読めるような交流を考えたい。

V 教師力向上実習Ⅱ（期間：平成29年11月20日～12月21日）

1. 手立て

①日記指導

実習Ⅰに引き続き、週2回のペースで実施をした。実習Ⅱでは、児童たちの文章を読んでどんなコメントを求めているのか考えながらコメントを入れた。さらに、児童が応答し合いたいと思うような質問をコメントとして多く投げかけた。

テーマ付き日記は、「理想の鍋 or ピザ or カレー」（好きなメニューを一つ選んで書く）と「デートするならここ！」の二つを実践した。このテーマは、（水登 伸子、2017）を参考にした。文章のみの表現にやりづらさを感じる児童のために、絵を使って説明しやすいよう「理想の鍋 or ピザ or カレー」というテーマを設定した。また、児童たちの人間関係において、自分に関することから、周りの友達や異性に視野が広がり、人間関係にも新たな広がりや他者への興味が強くなってきていると感じたため、児童が今一番興味のあることに即したテーマとして、「デートするならここ！」というテーマを設定した。

②テーマ付き「書けマス作文」

テーマは、「校内学芸会を振り返って」、「マラソン大会を振り返って」、「千尋先生の社会の授業をふり返って」、「行ってみたい都道府県」、「もし1億円もらえたら」、「もし自分がこのクラスの担任だったら」の6つを実践した。実習Ⅰでの学びから実習Ⅱでは、子どもたちの努力や成長を認め、私自身の感想も合わせてコメントすることで、児童との応答し合う関係を意識した。

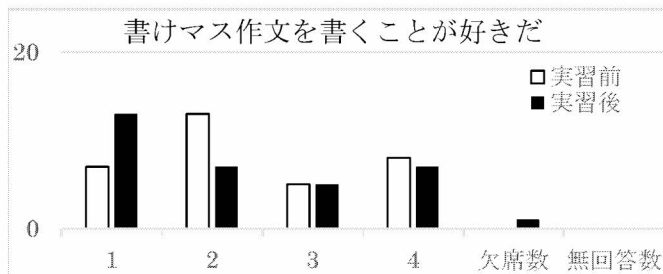
③社会科授業での振り返り作文

児童が歴史的・社会的事象を身近なこととしてとらえ、自分なりの意見をもって友達と共有できるよう、各授業のおわりに「自分だったらどう思うか」という設問を設けた。授業の振り返りの時間を使って児童に自分なりの意見を書かせ、次時の初めに全員の意見をまとめたプリントを配って意見の共有を図った。

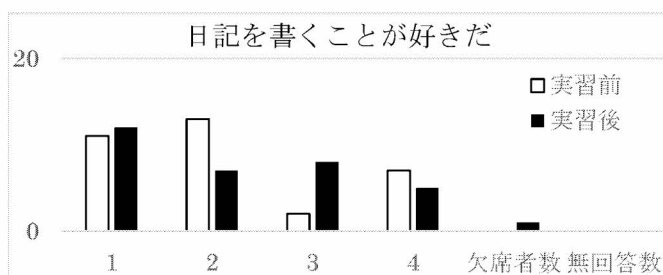
2. アンケート結果（設問①、③、⑤、⑪）

設問①は、「書けマス作文を書くことが好きだ」、設問③は「日記を書くことが好きだ」、設問⑤は「自分の気持ちや考えを、正直に作文や日記に書くことができ

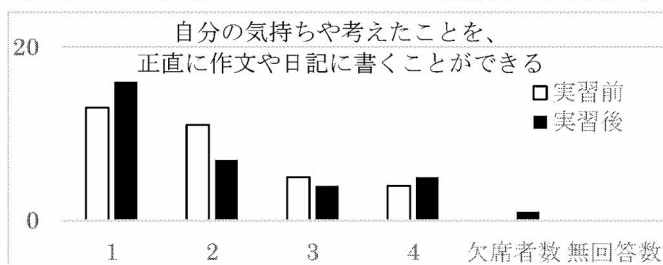
る。」、設問⑪は「普段の生活で、相手の思いや気持ちを考えながら会話することができる。」という問いで、それぞれ「1：あてはまる」、「2：どちらかというにあてはまる」、「3：どちらかというにあてはまらない」、「4：あてはまらない」の中から1つを選ぶという方法で回答してもらった。



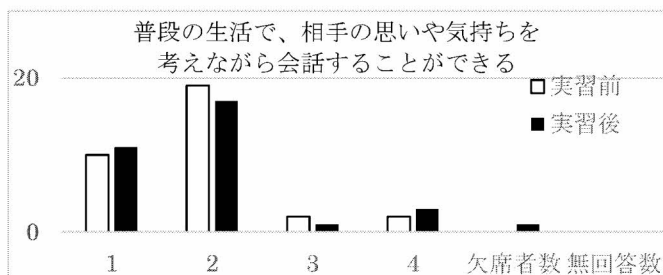
【グラフ3：実習Ⅱでのアンケート調査結果（設問①）】



【グラフ4：実習Ⅱでのアンケート調査結果（設問③）】



【グラフ5：実習Ⅱでのアンケート調査結果（設問⑤）】



【グラフ6：実習Ⅱでのアンケート調査結果（設問⑪）】

設問①と設問③におけるグラフを見ると、両方において1と2を選択した人数が多く、実習後に1と2を選択した人数の合計は、設問①においては実習前と同数であったが、実習後に1を選択した人数が6人増加した。一方設問③においては、全体の割合として1と2を選択する人数が実習前と実習後共に多く、実習後に1を選択した児童は2人増加した。しかし、実習後に1と2を選択した児童の合計は5人減少している。また、実習後に2を回答した人数が減少し、3を回答した人

数が増加したことも特徴の一つであると考えられる。

実習後のアンケートで設問①と設問③で数値が上がった児童は、選択した理由に「発言できない。恥ずかしい分、書けマスに書く。」(設問①)、「自分の思いを書くことが楽しいから。」(設問①)「先生と会話ができるから。」(設問③)など書いている。

このような記述から、普段の授業や学校生活で恥ずかしい気持ちから発言が少なくなってしまう児童も、日記や「書けマス作文」を通して自分の思いを表現する力が育っており、自分の思いを書くことの楽しさを感じていることが分かった。また、教師のコメントを介しての会話を楽しむ児童がいることも分かった。文章を使った教師とのつながりを児童が必要と感じ、それを実現することが、児童が他者に心をひらくための第一歩になるのではないかと考えた。

一方設問③は、実習後に2を選択した人数が減少し、3を選択した人数が増加していることが分かる。実習後に3を選択した児童の理由を見ると、「あまり書くことがない」、「その日に何もなかったらつまらないから。」といった記述がみられた。書くことがないということは、児童たちにとって書くことが思い浮かぶような経験や刺激がないということなのかもしれない。作文だけでなく普段の生活にも目を向けて、喜怒哀楽のある生活をつくれるように心がけることが大切であると学んだ。また、書いたものを交流する機会がないと他者からの刺激も少なくなり、自分の文章を膨らませたり書く視点を見つけたりすることが難しくなる。書いたものを交流する機会を増やすことで、児童たちの応答し合う力を深めることが大切であると思った。

設問⑤、設問⑩においても1と2を選択した人数が多く、実習全体を通して相手意識や自分の思いを正直に書くことを意識していた児童が多いことが分かった。設問⑤については、実習後に1を選択した児童が3人増加している。

実習後のアンケートで設問⑤と設問⑩で数値が上がった児童は、選択した理由に「自分のことやみんなのことが分かるから。」(設問⑤)、「自分も嫌な気持ちになりたくないから。」(設問⑩)などといった記述があった。児童が自分の思いを整理して、友達がどんな毎を送っているのか知りたいという好奇心も抱いているということが分かった。また設問⑩では、多くの友達が相手の気持ちを考えることで、自分が気持ちよく人間関係を深められると考える児童がいたことが分かった。相手のことも意識したかわり合いができるようになってきていると感じた。

一方、相手意識を強く感じすぎてしまうのか、「自分を書いた文章を人に見られたくない。」と訴える児童もいた。児童に直接話を聞くと、気の知れた仲の友達となら躊躇なく交流ができるが、クラス全体でとなると自分の文章に批評が生まれるのではないかと不安にな

るとのことだった。これは、普段から決まった友達とのみ深くかかわりがちな、児童たちの人間関係が影響しているのではないかと考えた。今後は、仲の良い友達との交流のみに目を向けるのではなく、日ごろからクラス全員でのかかわりを意識し、児童たちが自然と意見を交流したくなるような関係づくりを心がけたい。

3. 社会科の授業における作文

児童たちが自分なりの意見をもつことができるよう、授業の最後にオープンエンドの発問を投げかけた。児童たちは授業で学んだことと関連付けながら、発問に対する答えを自由に文章で表現することができた。

《児童の「書けマス作文」から》

ワークシートを書くのが楽しかった。自分の意見をみんなに知ってもらえるので、ワークシートはいいと思います。

社会の授業はもっと難しくなるので、がんばりたいです。
G 児

千尋先生の授業だとみんなの意見が見られて、分からないところもみんなの意見を見たら分かるようになったからよかった。
H 児

上記の作文は、「千尋先生の社会科の授業をふり返って」というテーマの「書けマス作文」での児童の作文である。このほかにも、「他の人の考えていることが分かった。他の人の意見と自分の意見の違うところや同じところを確認できた。」など、ワークシートを使った意見の交流を肯定的に受け入れる記述が多くみられた。

このように、児童の作文を定期的に共有することは、自分の意見をもったり授業の理解を深めたりすることに効果的であると考えられる。また、児童たちの中に他の人の考えを知りたいという潜在的な思いがあることが分かった。それをどう膨らませていくのかを今後の課題としたい。

VI 教師力向上実習Ⅱにおける成果と課題

1. 成果

教師力向上実習Ⅱにおける成果は、発言での表現が苦手な児童が、作文を通して自分を表現する力を身につけられたことである。そこで教師との信頼関係の構築や、作文を使った自己表現の楽しさを見出すといった、応答し合う人間関係を構築するための基礎が育成されていると考える。今後も児童との信頼関係の構築や作文を使った自己表現について学び、応答し合える児童の育成を目指したい。

2. 課題

一方課題としては、次の2点が挙げられる。一つ目は、文章を交流する機会が少なく、児童らの人間関係が応答し合うものになるような働きかけができなかったことである。児童たちの中には、他者の思いを知りたいという潜在的な思いがあることが分かったので、それをどう膨らませていくのか考えていきたい。

2つ目は、児童が書くことを思い浮かべられるような生活をつくることができなかったことである。今後は作文だけに目を向けるのではなく、児童たちの日常が喜怒哀楽のあるものになるよう、工夫したい。

Ⅶ 本研究から学んだこと

本研究では、2点を目的としていた。1点目は学校生活と日常生活につながりをもたせ、自ら思ったことを素直に書けるようになることである。これについては、実習Ⅰと実習Ⅱを通して実践した日記指導とテーマ付き「書けマス作文」がうまく作用し、生活の中で経験したことや自ら思ったことを素直に書くことへの抵抗感が低くなったと考える。アンケートの中の「書けマス作文を書くことが好きだ。」という設問では、実習Ⅰ開始時から実習Ⅱ終了時まで1を選択した人数が5人増加している。同じく「自分の気持ちや考えたことを、素直に作文に書くことができる。」という設問においても、実習Ⅰ開始時よりも実習Ⅱ終了時において1を選択した人数が3人増加している。

日記指導では、次の変化が特徴的であった。登場人物が増えたこととセリフ調の記述が増えたことである。これは、児童の日常生活における他者とのやりとりやそこでの発言や思いをありのまま作文に書けるようになってきたからだとは考えた。

これらの結果から、私は本研究における1点目の目的は、概ね達成できたのではないかと考える。

本研究の目的の2点目は、自分が書いた文章を受けとめてもらう経験をしながら、友達と応答し合えるようになることである。この点については、児童が書いた文章をクラス全体で読み合い、交流する時間を設けることができなかったため、友達と応答し合えるようになることは難しかったが、授業でのふり返り作文を共有したり、コメントを介して教師とのつながりを見いだしたりすることで、児童たちの中に文章を介した他者とのかわりに肯定的な気持ちが生まれた。実習Ⅱ終了時のアンケートや、社会科の授業を振り返った「書けマス作文」の中に「先生からのコメントが楽しみだから（好き）。」「みんなの意見が共有できて楽しかった。」といった記述がみられ、児童たちの心の中に自分の文章を受けとめてもらい、友達と交流したいという潜在的な思いがあることが分かった。実習Ⅰ・実習Ⅱを通して児童の思いを受け止めるコメントをしたり、児童と文章を介した対話を心がけたりした結果、児童が自分の文章を受け止めてもらえていると感じ、

アンケートの設問③で「思ったことを正直に書ける」と回答したのではないだろうか。

一方、クラスの友達と文章を共有するとすると、児童たちの中に抵抗感があることも学んだ。年齢を重ねるにつれて、児童たちの心の中に秘密にしたいことが生まれてくるのは自然なことである。書いた文章全てを共有するのではなく、秘密を守るべきところは守りつつ、児童の反応に合わせた文章共有のかたちを探っていくことが大切であると学んだ。また、交流は年度を通して位置づけることが大切であるということも感じた。児童たちが応答し合える人間関係を築くことができるよう、今後の課題としたい。

さらに、アンケートにおける児童の記述の中に「書くことが思い浮かばない。」というものがいくつかあった。これまでの実習を通して、児童らは自らが経験した事実について書くことを書きやすいと感じており、また心が動いた出来事について書く際は自らの思いを素直に表現できていることが多いことが分かった。これらのことから、児童たちには普段の生活体験や学校生活で書きたいと思う経験が必要であると考えた。今後は作文教育のみに視点を当てるのではなく、児童の心が動くようなしかけや学級づくりを心がけたい。

《引用・参考文献》

楠 凡之, 2015, 「現代の子どもの抱える生きづらさと生活指導—個人指導と関係性の指導に視点を当て—」, 竹内常一ほか編著, 『生活指導とは何か』, 高文研。三谷祐児, 2007, 『書く力を高める 小学校「一〇〇マス作文」入門—題材選択能力の育成と共通・継続・肯定実践—』, 明治図書。水登 伸子, 2017, 『学級づくりがうまくいく! 中学校「お題日記&学級通信」』, 明治図書。森川 正樹, 2011, 『クラス全員が喜んで書く日記指導』, 明治図書。村山 士郎, 2009, 『豊かなことば育ちが心と学力の基礎(もと)』, 本の泉社。日本作文の会, 2016, 『「書くこと」の授業を豊かに—作文教育で「アクティブ・ラーニング」の先へ—』, 本の泉社。小川太郎, 1966, 『生活綴方と教育』, 明治図書。

《付記》

教師力向上実習Ⅰ・Ⅱや日々のサポーター活動においては、連携協力校であるA小学校の校長先生、教務主任の先生、指導教諭の先生をはじめ所属学年の先生方には大変お世話になりました。お世話になった全ての先生方や職員の皆様に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、サポーター活動、実習Ⅰ・Ⅱ、終了報告書の作成においてご指導を頂いた中山弘之先生、実習コーディネーターとしてご指導を頂いた山内雅夫先生をはじめ全ての先生方に心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。